

鳥取・天神山遺跡



(鳥取北部)

1 所在地	鳥取市湖山町
2 調査期間	一九八九年(平1)三月～四月
3 発掘機関	鳥取県教育委員会
4 調査担当者	中村 徹
5 遺跡の種類	城郭跡
6 遺跡の年代	一五～一六世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	

天神山遺跡は、鳥取市の西部にある湖山池の東岸に位置し、現在は県立鳥取農業高等学校の敷地となっている。この遺跡は、室町時代の有力守護山名氏の因幡一国支配の本拠地、いわゆる「因幡守護所」である。

山名氏は、最初は巨濃郡岩常(岩美郡岩美町岩常)の二上山に城を築いたが、文正元年(一四六六)ごろに高草(鳥取北部)郡布施郷(布勢)にある標高二五mの天神山に城を移し、

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

天神山城は、「因幡民談布施城図」「因幡大図」「因伯古城跡図志」によると、天神山山頂に三階の天守が建ち、天神山を取り囲むように内堀が掘られ、さらにその外側には天神山とその南にある宇山を取り囲む外堀が巡っていたようである。現在は、天神山周辺は、鳥取農高や民家が建ち並んでいるが、天神山は、山頂に井戸や堀割などがよく残り、県指定史跡として保存されている。

天神山城に関する調査は、一九七三年・八〇年に行われ、内堀、土塁、井戸等が確認されている。今回の調査は、鳥取農高の校舎増築に伴うもので、天神山の南東にあたる二〇〇mの範囲で実施した。調査区は、一九七三年の調査で確認された内堀と土塁が巡ると推定される場所で、推定どおり内堀が確認された他、柱穴と、貝塚も検出された。但し、調査範囲が限られており、遺跡の全容をつかむにはいたらなかつた。

遺物は、整理用コンテナで六箱あった。内容的に見ると、土器類は、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦質土器があり、大

半は土師質の皿である。瓦質土器は、羽釜、土鍋、火舎である。陶

磁器には、越前焼甕、備前焼擂鉢、輪花青磁皿や青磁碗、青磁香炉

白磁皿、伊万里皿、染付け等がある。また、低湿地であつたため、木製品も比較的よく残っていた。塔婆、下駄、ヘラ、糸巻、漆器椀、箸、曲物、板材、棍棒状のもの等が見られる。その他に、土鍤や硯もある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 梵字北

(160) \times 25 \times 7 011

(2) □の□

166×22×4 033

(1)(2)とも内堀で検出された。(1)は上部(五文字)と下部(一文字)

に区分けされて書かれている。上部は梵字の切継半体下部で書かれている。二字目は茶(da)、三字目は跋(pa)、五字目は婆(bha)と読めるが、その内容は不明である。下部は、行書で「北」と書かれていることから角塔婆と思われるが、角塔婆の場合は、東を発心門として他の三方には点を加え、北方は「チャタラチャバタクア」と書くのが一般的である。

(1)(2)とも、共伴する土器から一六世紀のものと思われ、天神山に守護所が置かれていた時期のものと思われる。

天神山周辺の丘陵上には、中世墓が多く調査されており、天神山

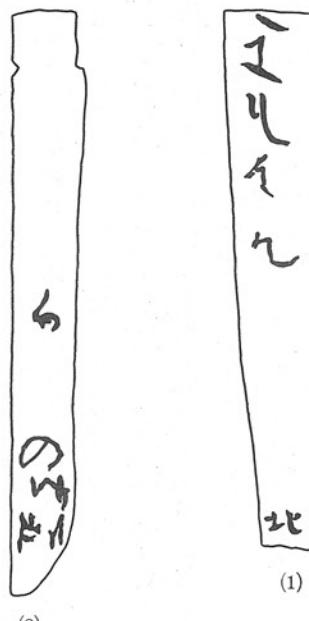
城をめぐる攻防と、この塔婆とが関係をもつのかどうか、今後の調査と研究に期待したい。

鳥取県教育委員会『天神山遺跡発掘調査報告書』(一九八九年)

同『天神山遺跡発掘調査概報』（一九七三年）

同『鳥取県史』（一九七三年）

中村
徹



(2)